サービスラーニングとボランティア

逸見　敏郎

サービスラーニング（Service Learning、SL）は、2012 年の中教審答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」でも言及されているように、大学における新たな教育方法として注目を集めつつある。本学でも 2016 年度正式開講に向けて、2013 年度よりパイロット授業「社会で学ぶこと、立教生ができること」が展開された。ここでは、SL とボランティア活動について検討していきたい。

SL とは、正課授業に位置づけられ、学生が教室での学びを基にして、現実社会の中で一定期間活動し、その両者を事後学習のなかで省察(reflection)するプロセスをとおして、自分自身が定位する社会の課題を理解し、その課題に対して行動できる姿勢を涵養することが基本的なスキームである。SL とボランティア活動の違いは、ボランティア活動の基本的理念として言われる「自発性、無償性、相互性」に関する点、および SL は正課授業であるため、成績評価に加えて授業科目としての到達目標など教育的目的が設定されている中で社会において活動するという点にある。一方で双方に共通することは、学生が活動する場が学生のいわば本拠である自宅や大学ではなくその中間領域、すなわち「あいだの空間」にあることである。

ところで、本学学生によるボランティア活動は、ボランティアセンターが創設される以前からチャペル団体やサークルなどでおこなわれていた。また学生部やチャペルが主催する過疎地域や施設でのキャンプは、1950 年代から実施されていた。このような活動は、「キリスト教に基づく教育」という立教大学の建学の精神が ethos としてキャンパスを包み込んでいたことにあることは疑う余地はない。そしてこの学生によるボランティア活動やキャンプは、自宅(private)と大学(official)のあいだにある社会(public)を舞台に、活動先が必要とする活動をおこない、そして結果として学生にとっては活動体験を通しての自己覚醒という気づきを促すことにつながっていった。それは現代精神分析学の言葉を借りるならば、「two-person model」、受け入れ先の人たちも学生たちも協働作業の時間を重ねることにより共に変容していく、ということである。

SL は受け入れ先の人たちと活動する学生たちというふたつの主体に加えて、その「あいだ(The space between)」(Ogden.T.)をより重視する。この「あいだ」には、双方の関わりの中で生起した様々な想いや新たな課題、課題解決のためのアイデア、エネルギーがあたかも新たな主体、すなわち第3主体、として生まれてくるからである。この第3主体は可視的なものではない。しかし、SL における事後学習(reflection)や、活動の多面的評価のなかで形をもったものになる可能性を十分に秘めている。例えば SL の先進国アメリカの例をひけば、地方自治体への政策提言と言う形で、第3主体を目に見える形にしている。これは SL が学生の社会参加の体験をとおして政治参加のリテラシーを修得する機会にもなり得るという可能性を示唆する。加えて SL はチームでの活動が中心となり、受け入れ先の人々とも協働していくことが不可欠となる。従って、SL を通してリーダーシップやフォロアーシップを体験し、理解修得する機会にもなる。特にリーダーシップにおいては、他者のニーズに応える活動をとおし、周囲からの信頼を得て、メンバーから主体的に協力を得られる行動をとるサーバント・リーダーシップスタイルを修得することも可能となろう。

SL が本格展開することで、ボランティアセンターの役割が変化することも予測される。しかし、ボランティア活動をとおして学生と社会をつなぐパイプであることには変わりはない。SL の目的や効果を視野に入れ、恐れることなく新たな役割と機能を模索していきたい。

（学校・社会教育講座教授　ボランティアセンター副センター長）